



「カウパーがだらだら溢れてきて、ふぁん……だめ、わたしこんな臭いにおい好きなんかじゃないんだから」

「ひゃ、出すの、出しちゃうの!?!」コンドームパンパンになるくらい大量のせーし……ふぁん♡お、オナニーなんかしないわよ!?! おちんちん見てオナニーなんて変態、もう、わたし変態じゃないんだから……はぁ、はぁっ♡」

「あ、あ、おちんちんぐくぐくっせーしの匂いも……わたしの目の前で、ふぁ、ダメなのにっ——んぶっ、んぶ、あぶぶぶ、ひゃぶぶぶっ……んぶっ!?! ひゃぁっ♡」

「あぶっ、顔にも、髪にもたっぷりザーメン、かかっっっ、びちゅびちゅ、目開けられない」

「んあ、んあぁッ、アロアロの濃いせーしまだ出てっ……はぁはぁ、」の熱と匂いすっ……っ♡……」

「ちっ、違っっっそんなわけ……ないっっ、言っっっ……」

「ぶっかけられて、興奮するだなんて、絶対ないからっ——」

「な、何よ。今度は三人でなの。じゅ、十人全員でもいいわよ、それくらいじゃなんでもないんだ、から……んひいー！ 勃起チンポ、んぶっ、顔にも、髪にも、んあっ、おっぱいにも擦り付けて、変態——」

「き、気持ち悪だけよ、こんなガチガチで我慢汁だらだらにたらしてるちんぽなんて……んあっ♡ 精液染み込ませるおっっ、ぬるぬるっ……鼻にまで!?! んんっ、もっっ、せーしの匂いしかし無い……んぶっ、お、美味しくなっっ♡」

「んあっ、ん……はぁ、はぁっ♡」

「何これ、勃起したものを擦りつけられてるだけなのに、んぶっ♡♡あ、あそこに入れられてるわけでもないのにっ……ん、んぶ、あぶっ♡」

「んんんくオナちんちんも、汗の匂いも、深呼吸のたびに、はぶっ、く、クセになっっきてえ……んぶっ、裏筋の、せーしのすえた匂いなんてかきたくないのに、ちゅばれろ。ん、んん!?! わたしなっっ……」

「んんのおかしいよぉ……っ……っ♡♡うっ……そんな、はぁはぁ……精液が大好きになるなんて……ほんとに変態っ……でも、ん、ん、これくらいで聖恋天使プリム・ポーシヨンの心を折るなんて、まじなっ」

「んぶっ!?! おちんちん擦りつけちゃだめ!?!」

「わたし、こんな変態じゃないのに、自分からオチンポに類すりして、ぬるぬるのっ……っ……っ……ガチガチなちんぽの……求めちゃっっ……はひひっ……っ♡」

「服の中に入れちゃダメ!?! わ、脇にも、ソックスの中に突っ込むなんて変態、変態、へ、変態なんだからっ……ん、んあ、あぁ……ん、んぶ、めっ……っ……」





